

日本語を取り巻く 2019 年

～どうなる、令和時代の日本語～

シンキング・バーズ

日本語研究班

「令和」の始まりと
日本語文章の役割変化

アッという間に年の瀬を迎えてしまった感のある 2019 年は、ワタシにとっては、「令和」という元号への改元が、最も印象に残る年でした。元号という制度への賛否は、いろいろありますが、少なくとも日本的な暦法を継承した改元という意味では、一定の文化的価値がある出来事だったと思います。

「令和」という元号を見た時のワタシの印象は、少し冷たいでした。恐らく「令」という漢字のイメージから来るもので、近年の日本人を形容することばの一つになっている「クール」と関連づけたのか、などと思ったりしました。元号史上初の漢字ということで、「令嬢」のような気品を持つイメージだと良いですね。「命令」のイメージは、ちょっとゴメンナサイです。

「和」は、やはり「平和」の「和」を思い浮かべました。人によっては、「大和」の「和（倭≡日本人）」を思った人もいるかもしれません。いずれにしても「和」は、日本人にとって、聖徳太子の「和をもって尊しとなす」以来、馴染み深い漢字です。

ワタシとしては、「令和」の時代の日本が、「気品漂う平和な時代」となってくれば、元号の持つ意味も、まんざら捨てたもんじやない、なんて思ったりします。

●日本語文章の位置

日

本の若年層の日本語を記述する能力は、

劣化が甚だしいと言われ

ています。単語レベルの語彙力はもとより、文章記述力、文章全体を読んで文脈を解読する能力など、英語学習に力を入れる以前に、日本語を学ぶ必要があると言われるほど、日本語文章と疎遠な若者たちが増えていようです。

その要因の一つが、デジタル化の進展です。日本語を文章として理解するより、見出しや単語で理解するケースが増え、長文を読む機会が極端に少なくなったため、必然的に読み書き能力は劣化したのです。また、会話体の文字化に馴染んだ結果、シナリオ的（感覚的）なト書きは書いても、論理展開を必要とする文章は苦手になります。

その意味では、大学入試に記述式を導入するのは、必ずしも悪いことではありません。しかし、多くの指摘があるように、採点する側の問題として、書かれた日本語をどう評価するかは、とても難しい問題です。

日本語は、社会環境の変化に伴って、文章としての役割を、徐々に失いつつあるのかもしれません。ワタシたちは、ワタシたちの日本語に誰も関心を示さなくなっても、日本語文章を書き続ける心づもりですが、それをもって 2019 年の日本とするのは、かなり寂しい限りです。

(2019 年 12 月 3 日)



シンキング・バース新書

ボクとワタシの日本語診断
日本語を取り巻く 2019 年
2019 年 12 月 3 日（初版）発行

著 者：シンキング・バース
日本語研究班

発行者：遊佐 芳泰

発行所：**シンキング・バース**

〒021-0821

岩手県一関市三関字神田 1 0 5 番 5 号

電話／F A X 0191-23-0724

※この論考の著作権は、図表を含めてシンキング・バースに帰属
しています。複写、無断転載、無断転用は固くお断りします。